慈済

ものがたり

ツーチー　2019年7月　*271*

●表見返し　文・證厳法師
訳・済運　撮影・黄筱哲

喜んで法の楽しさを伝える

心軽やかに自在に善を広め、
人に出会えば、喜んで法の楽しさを伝えましょう。
仏法を修め、慧命を成長させて衆生を悟りに導き、
自他ともに利するのです。

目次

【社論】
心打つ平和をもたらす力　慈願／訳　4

【主題報道】
サイクロン・イダイ被害
東アフリカ三国支援　済運／訳　8
モザンビーク 思いは千里のかなた　黒川由希／訳　14
モザンビーク できることに取り組む　黒川由希／訳　29
ジンバブエ 土石流後の帰宅　惟明／訳　46
マラウイ
住民が協力して村の復興を成し遂げる　心嫈／訳　58

【人物誌・台湾台南】
子供のような純粋な心を失わず　葉美娥／訳　70

【證厳法師のお諭し】
この世を照らす仏法　慈願／訳　84

【高齢者は問題ない】
ハンググライダーのように
晩年を優雅に飛ぶ　惟明／訳　90

【衲履足跡】
人の世の苦しみを理解する　済運／訳　102

慈済大事記【六月】　済運／訳　108

表紙

2019年３月、サイクロン・イダイが２度、東アフリカのモザンビークを襲い、数多くの犠牲者を出すと共に甚大な経済的損失をもたらした。４月８日、被災地ティカ村での慈済の配付活動で、現地の職員兼ボランティアである蘇柏嘉師兄がケア世帯への物資の配付を手伝った。施者（布施をする側）と受者（布施を受けとる側）共に和気藹々として喜びに満ちていた。

社・論

心打つ平和をもたらす力

◎訳・慈願

「大いなる愛は、如何に遠くともその力を届かせる」。三月中旬、サイクロン「イダイ」がアフリカ東南部を襲い、甚大な洪水被害をもたらしたことをいたみ、證厳法師は援助の手を差し伸べるよう、再三にわたって呼びかけた。

五十二か国にわたる慈済人は直ちに各地で募金活動をする。被災地の一つであるマラウイでは、長年寄り添っていた現地ボランティアが村民に支援を呼びかけたところ、たとえ台湾元にして五元の少額であっても人々の心を動かしていった。

サイクロン「イダイ」は数十年来最悪規模の災害をもたらし、中でもモザンビーク、ジンバブエとマラウイは最も深刻な状況で、百万人以上が家を失った。国連は人道支援を呼びかけ、国際組織が続々とそれに呼応しているが、慈済も即刻調査と配付を展開した。

しかしながら、大多数のアフリカ国家の財政は、長年ひっ迫した状態が続いている。かつて西欧諸国の植民地であったため、インフラ整備が遅れており、災害に対応する術も無く、被災後の復興は前途多難である。

アフリカのメディア報道を見ていると、貧困以外に種族間の争いが絶えないという印象を受ける。近代になって「国家」という行政概念が取り入れられたことが大きな原因となっている。現地の種族分布を無視し、元来の文化と血縁関係のつながりの間に国境線を引くような事を強行したため、種族の

分裂と対立を引き起こしたのだ。そして欧米の教育方式は取り入れたが、識字率が低いため、自国での人材の育成に困難をきたしている。

慈済は一九九二年、南アフリカに連絡所を設置した。当時は種族隔離政策に対峙する人権意識が高まっていたため、現地住民のストライキ等により治安が混乱し、中国人を含む外国商人が続々と引きあげていった。しかし、證厳法師は「現地で得た利は現地に還元するように」と励まし続け、台湾商人を主とした慈済人が部落や地域を訪れるようになった。

慈済ボランティアは民生物資の支援以外に、教育に力を入れ始めた。学校の建設、奨学金の提供並びに婦女子が生計を立てるための技能養成施設として裁縫訓練所を設立した。男尊女卑の意識が高いゾール族部落の中で、経済的に自立した女性たちは、その後、部落に入ってエイズ患者に寄り添ったり、国を超えてボランティアと一緒に貧困者ケアを行っている。あるゾール族の女性は国連にも招かれ、そのような自分の経歴を紹介した。

この二十六年間、アフリカ東南部の八カ国では現地ボランティアが次々と誕生しているが、今回、災害が深刻だったこの三カ国もその中に含まれている。彼らの生活は依然貧困ではあるが、心は豊かである。ボランティアは、広大な地で治安と衛生の悪い場所への調査と配付に赴いている。恐れをものともしない大きな悲願があるからこそ成し遂げられるのである。

多くの種族が入り交じるアフリカの部落ではコミュニケーションに通訳が必要である。現地ボランティアはその橋渡し役になっていると同時に、慈善の力を社会の暗がりの奥深くまで浸透させているのだ。彼らが荒れた砂漠や草原そして災害支援をする中で、身をかがめて人々に寄り添う姿は苦難を超越し、人々を感動させ、平和をもたらす力と成りうるのだ。

（慈済月刊六三〇期より）

主題報道

サイクロン・イダイ被害

東アフリカ三国支援

●サイクロン・イダイ被害から1ヶ月、避難所のテント区域の人口は徐々に減りつつある。2人のモザンビーク人が僅かに残った家財道具を頭に載せ、慈善団体から贈られたテントを持って草原を渡り、嘗て住んでいた場所に向かって旅立った。（撮影・蕭耀華）

二〇一九年三月中旬、勢力の強いサイクロン・イダイが東アフリカに大きな被害をもたらしました。強風と豪雨は沿岸地帯から内陸部へと移動し、局部的に千ミリの雨を降らせたため、山津波や土石流が発生し、ダムが決壊したのです。

モザンビークとジンバブエ、マラウイの三カ国で三百万人近い住民が影響を受け、モザンビークでは国全体が緊急事態に突入しました。元々貧しいそれらの国では被災後、復興がままならず、遠隔の被災地は道が断たれ、食糧が欠乏しました。

アフリカ四カ国の慈済ボランティアは直ちに視察に出発し、交通の困難を克服して食糧と日用品を住民に届けました。被災後の復旧の道程が長くてもボランティアは寄り添って行きます。

サイクロン・イダイを知ろう

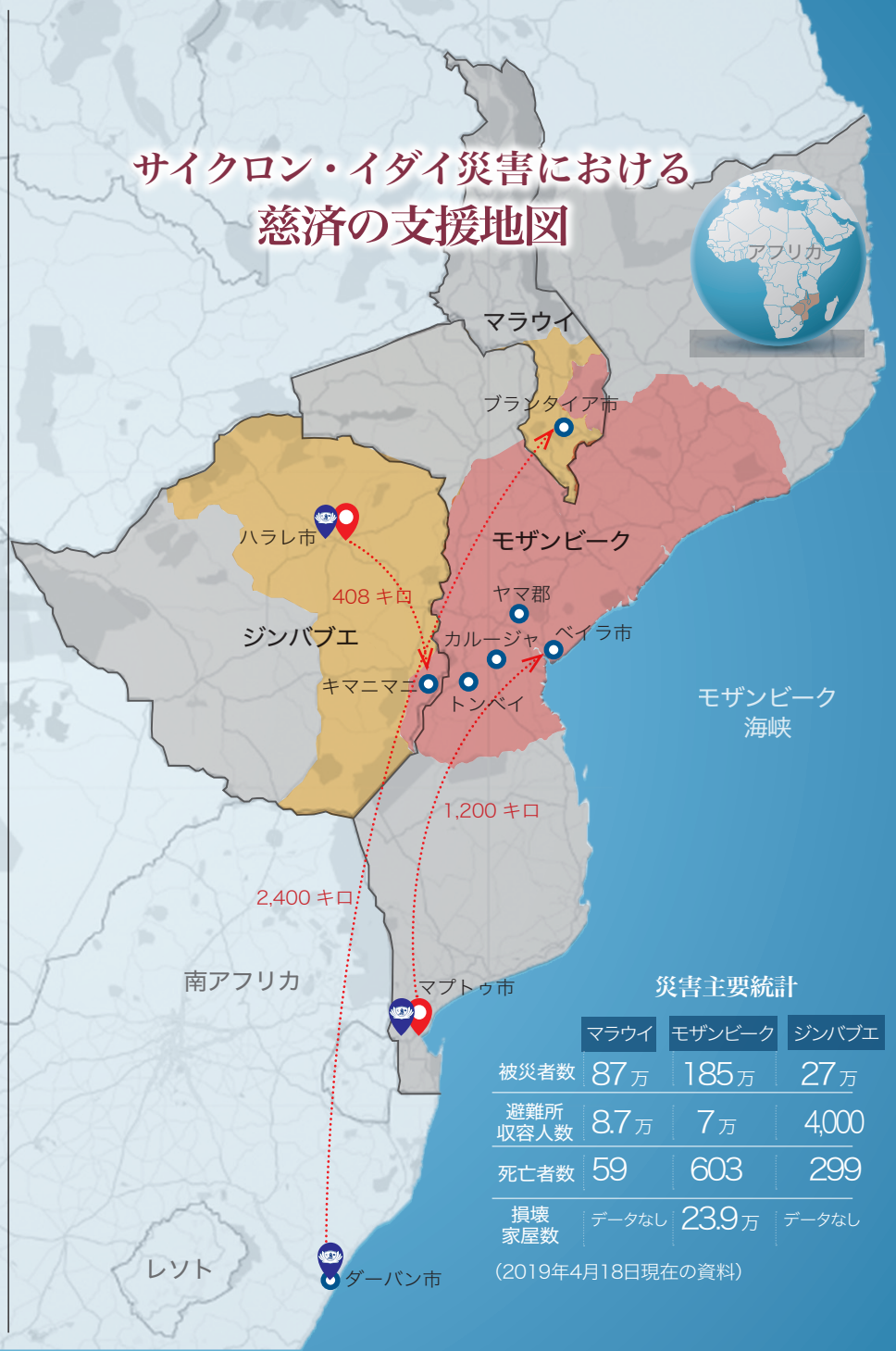
Q1 どうしてサイクロン・イダイは東アフリカにこれほどの被害をもたらしたのですか？

勢力の強い台風並みの熱帯サイクロン・イダイは発達期間が長く、2度に渡って東アフリカを襲いました。3月15日にモザンビーク中部に上陸し、秒速48・6メートルの風を伴ったまま内陸部に向かい、隣国のジンバブエ、マラウイへと進路を進めて600ミリから1000ミリの雨を降らせました。

豪雨は多くの河川で山津波をもたらし、下流のモザンビーク沿岸地帯の平野が冠水して水が引きませんでした。2本の主要河川に挟まれた河口に位置するベイラ市は正にサイクロンが上陸した地点で、上流のダムが決壊したため、市街地の90パーセントが冠水したのです。

モザンビーク、ジンバブエ、マラウイの3カ国では一人当たりのGDPが1500米ドルに満たず、財政は長期的に貧困状態にあり、公共施設は老朽化し、防災と救済能力は著しく不足しています。近郊住民の家屋は多くが粗末なレンガ作りや茅葺きの家で、洪水の勢いには耐えられませんでした。洪水被害は東部アフリカに20年来最も大きな被害をもたらし、3カ国の被災者は約300万人に上りました。

サイクロン・イダイ災害における慈済の支援地図



被災地
重大被災地
首都
慈済支部、連絡事務所
アフリカ慈済ボランティアの支援経路

災害主要統計

	マラウイ	モザンビーク	ジンバブエ
被災者数	87万	185万	27万
避難所収容人数	8.7万	7万	4,000
死亡者数	59	603	299
損壊家屋数	データなし	23.9万	データなし

（2019年4月18日現在の資料）

資料の提供・OCHA、INGC、The World Bank、relief web、US AID、ICRC、慈済基金会
整理・葉子豪、李秀玲
訳・済運

Q2 被災後の住民はどのような状況ですか？どんな支援を必要としているのですか？

洪水や土石流で被災地の交通や通信、電気、水道などのインフラが損壊し、被災地の住民は飢餓や伝染病の危機に晒されており、直ちに食糧と浄水、伝染病予防医薬品を必要としています。モザンビークで重大な被害を被った地域は農地であるため、農作物の被害が大きく、この先3ヶ月間、食糧不足が懸念されるため、農耕の再開が急務になっています。

Q3 国際社会ではどのような人道支援が展開されていますか？

国際支援団体は断たれた交通を克服して食糧や避難所、医薬品などの緊急支援を行なっています。

伝染病予防：被災後、モザンビークでは伝染病が発生しました。コレラ患者は5800人、マラリヤ患者は1万人を超えました。コレラやマラリヤの伝染拡大を防ぐため、WHOは4月上旬からモザンビークで88万4千人分余りのコレラ予防の経口薬を投与し始めました。また、他の団体もマラリヤ予防のために蚊帳を提供しています。

食糧援助：国連の統計によると、モザンビークでは既に110万人が食糧援助を受け、90万人が清潔な飲料水を受け取っています。ジンバブエでは3万人が食糧、4万3千人が飲料水を受け取り、マラウイでは9万人が援助を受けています。

Q4 慈済基金会の支援状況はどうなっていますか？

その他、米国国際開発庁（US・AID）はその3カ国に浄水や避難場所、緊急食糧などを提供し、赤十字社はトラックやヘリコプターによる医薬品と手術用器具の輸送を支援している他、無料の電話やインターネットサービスを提供しています。

南アフリカとモザンビーク、ジンバブエ、マラウイの現地ボランティアがいち早く視察と支援活動を始め、その後、海外の慈済ボランティアが加わって大規模な災害支援活動を計画し、実行しています。

＊支援の統計：

4月18日現在、3カ国の被災者8583世帯に緊急災害支援の食糧と生活用品パック、浄水剤10945回分、エコ毛布2100枚、多機能福慧ベッド68床、蚊帳4176丁、10キロの白米2345袋などを配付し、マラウイでは70棟のレンガ造りの家を建設しました。また、4月末までにモザンビークで1万世帯に緊急支援用食糧パックを配付する予定です。

台湾から届いた1260枚のエコ毛布は5月半ばにモザンビーク、下旬にジンバブエに到着し、大規模な配付活動を予定しています。

＊支援建設する学校の視察と被災者への建築道具の配付。

＊52の国と地域の慈済会員が心から募金への協力を呼びかけて支援。

（慈済月刊六三〇期より）

モザンビーク Mozambique
思いは千里のかなた

文&撮影・蕭耀華　訳・黒川由希

●3月、サイクロン「イダイ」はアフリカ東部の3国を2度にわたって襲った。先ず、モザンビーク中部の沿海都市ソファラ州に上陸し、多くの死傷者と建物の損壊をもたらした。モザンビークの首都マプトにある慈済連絡拠点は直ちに災害調査と支援活動を開始し、500人のボランティアが昼夜兼行し慈済支部で1袋20キログラム以上の生活物資を5000袋梱包し、急いで千里の彼方にある被災地に送った。

サイクロン被災者が、最も必要とするのは食糧であり、その次が避難所である。国際慈善組織は直ちに種子や農耕機具を届けたが、すぐに植え付けを行ったとしても、収穫までには時間がかかる。被災したばかりの人々は、直面する食糧不足と公衆衛生の危機にどう対処すればよいのだろうか。

二〇一九年四月三日夕方、アフリカのモザンビークの首都マプトのマホタス地区にある支部の園内では、女性を主とする約五百人の人々が物品の仕分けと袋詰めをしていた。作業中、笑い声が響き渡り、時には歌ったり踊ったりすることもあり、道ゆく人はお祭りかと思った。この女性たちは園内で二週間以上昼夜分かたず作業しており、まだしばらく作業を続けなければならなかった。

この喜んで無償で働く女性たち、モザンビークの慈済ボランティアは、「慈済の家」と呼ばれる支部拠点で一袋二十キログラム以上の支援物資五千袋を袋詰めして緊急に被災地に発送した。

災害、疫病、食糧難

これら全ては三月から始まった。サイクロンに二度襲われたアフリカ東部は、モザンビーク、マラウイ、ジンバブエの三カ国に大きな被害をもたらした。

サイクロン「イダイ」は三月四日に形成され、ゆっくりとアフリカ東部を移動した後、一旦モザンビークの東海上に出て、三月十四日再び海峡からアフリカ大陸へと向きを変え、十五日モザンビーク中部の大都市ベイラに上陸した。

「イダイ」の非常に強い風と雨はモザンビークで死者六百人余り、家屋の損傷二十万世帯余り、学校の教室の損壊三千箇所余の被害をもたらした。七十一万ヘクタールの農地が水没し、生活物資の不足は深刻で、救援が焦眉の問題であった。

サイクロン被害の後、モザンビークの現地慈済人は直ちに被害調査と支援活動を展開した。三月二十日、首都マプトの慈済人は二手に分かれ、現地の慈済ボランティア・ディノフォイはソファラ州の州都ベイラに向かい、被害調査を行っ

て被災地の状況を報告した。

同じ頃、モザンビークにいた蘇柏嘉師（スー）兄（シオン）と現地ボランティアは、支援物資の白米と緊急生活物資を車に載せて北上し、千二百キロメートル以上の寸断されていたり、ぬかるんだ道を経て、大きな被害を被ったソファラ州グルジャ村に到着した。二十七日、現地の被災者に白米を配付し、二十八日はマニカ州ドムベ村で白米を配付した。三十一日はグルジャ村のドンド避難所で生活物資の緊急配付を行った。

四月、世界の慈済人の愛で募った二回目の生活物資がマプトの「慈済の家」から大型トラックで千キロ以上の道のりを経て、ソファラ州の重被災地、ンハマタンダに届けられた。

今回のサイクロンでンハマタンダは八割の建物が倒壊し、五万世帯余りが被災した。四月七日以降、アメリカ、台湾、中国、南アフリカ等の慈済人がモザンビークの現地ボランティアと共に、ンハマタンダ、ティカ、ラメゴ等の村で老人や子どもがいる家庭に緊急支援物資を届けた。各世帯にトウモロコシ粉、豆、油、塩、石鹸、スプーン、歯ブラシと歯磨き粉、バケツなど、一世帯が一ヶ月に必要な生活必需品である。大規模な配付が継続して行われ、四月中旬までに五千世帯余りの被災者が恩恵を受けた。

災害はサイクロンだけにとどまらず、コレラの発生が一触即発の状態だった。また、サイクロンにより農地と作物が大きな被害を受けたため、被災地では食糧不足に陥り、モザンビーク第三の人道危機災害が予想された。

被災者が最も必要とするのは食料であり、その次が避難所である。国連人道問題調整事務室の統計によると、被災後、約百万人分の食糧が届けられ、食糧農業機関や各国の慈善団体は既に百八十万トンの種子と農耕機具の支給が行われていたが、直ちに土地を耕して植え付けを行ったとしても、収穫までには暫くの時間を要するため、食糧不足は避けられなかった。

また、生活が再建されるまで、多くの被災者は衛生条件の極めて悪い避難所で暮らさなければならず、衛生と健康面に心配が残る。ぬかるんだ大地で慈済の物資配付と支援活動は今後も継続される。

（慈済月刊六三〇期より）

生存の危機に直面する貧困者

↑国道六号線沿のティカでは被災者のための臨時テント区内で、お腹をすかせた子どもが海外慈善団体の炊き出しの列に並んでいた。

←ティカの被災地で子どもが臨時に住んでいるテントの前で懸命に火を起こそうとしていた。

普段から物資が欠乏していたンハマタンダでは、被災後、状況は更に悪化した。食糧不足が最大の問題である。

→ソファラ州ラメゴ村では共用ポンプで飲料水を汲み上げている。

慈済の支援

●アフリカ東部に位置するモザンビークは海岸線が２６３０キロにも及ぶ国である。国の経済は低迷し、国連は低開発で重債務貧困国であると公布している。

●２０１２年、長年当地に居住している台湾人の蔡岱霖が慈済と連絡を取り合い、慈済南アフリカ支部ボランティアがモザンビークで支援活動に参加した。蔡岱霖とモザンビーク籍の夫、ディノは現地で積極的に貧困支援をしており、現在までに首都マプトで３０００人以上の現地ボランティアを育ててきた。

●２０１９年サイクロン「イダイ」により、２０万世帯以上の家屋が損壊したり、流失し、１８０万人以上が被災し、全国に緊急事態宣言が発令された。慈済ボランティアはマプトから中部地域に災害調査に出向き、その後、海外からのボランティアと共に大規模な支援活動を展開した。４月３０日までに１万世帯に緊急時の食糧と生活物資の配付を終えた。

洪水後の飲料水不足

↑ソファラ州の州立衛生所で、海外慈善団体が提供したコレラ予防ワクチンを服用する現地の人々。

←被災後水没した農地は何週間も水が引かず、子どもの遊び場となっていた。

ソファラ州の衛生条件は悪く、被災後状況は更に悪化し、コレラが発生していた。溜まった水が引かず、飲料水の水源が不衛生だったため、コレラ発生の条件が揃っていた。

明日を待ち望む

サイクロン災害後、慈済基金会は多くの人と物資を投入すると共に、国内外のボランティアや善意の人々に、思いやりの大愛精神を発揮することを呼びかけ、被災地に生活必需品パックと米を配付して人々の生活が楽になることを期待した。

→ンハマタンダの物資配付会場で、慈済の行動に感謝し、1人の女性が證厳法師の法相に頬を寄せていた。

↓物資の配付活動で慈済ボランティアが物資を受け取った被災者を手伝った。

→食糧を受け取り、当分の食事に事欠くことがなくなったと喜ぶ被災者。生活物資パックの中には食器や洗面用具も用意されており、伝染病を予防することができる。被災者は顔を綻ばせた。

モザンビーク Mozambique
できることに取り組む

文・蔡凱帆（南アフリカ・ヨハネスブルグ慈済ボランティア）撮影・蕭耀華

慈済ボランティアである私は災害支援に参加するために、南アフリカからモザンビークへ向かった。国際慈善組織や支援チームと傷跡が生々しいベイラ市で合流した。孤立した村や寸断された道路、そして、飲料水を待ち望む住民たちを見て、私たちは力を合わせて最も援助を必要とする場所に支援の手を差し伸べた。

サイクロン「イダイ」がアフリカを襲ったその一週間、私は毎日出勤途中に被災状況のニュースを聞いていたが、死傷者は日増しに増えていった。国際救援組織が続々と大きな被害を受けたモザンビーク中部の大都市ベイラに向

●ベイラ市郊外では多くの道路が損壊して交通が寸断され、物資の輸送に影響が出ている。

●重被災地では充分な物資が手に入らず、トラックの調達も困難だった。１２００キロ離れたマプト市の「慈済の家」が支援物資の集積地となり、現地ボランティアが生活物資パックとトウモロコシ粉をリレー式にトラックに積み、中部の被災地に運んだ。

かっていた。慈済ボランティアとして、被災者のために自分は何ができるだろうかと考えた。

一九九三年、私は両親と共に南アフリカに移住し、ヨハネスブルグで就学、就職し、既にそこに暮らして二十六年目になる。近隣のアフリカ南部の国々と比べ、南アフリカには豊かな大自然と発達した近代国家の双方があった。しかし、人々の貧富の格差が大きく、教育水準が低かったため、窃盗や強盗が多発し、日々の生活は戦々恐々としており、いつ襲われるかとビクビクしていた。

そのような状況下でも、南アフリカの華人ボランティアは貧困者を支援し、富裕な人を教育する活動を続け、農村で慰問をしたり、物資の配付を行っている。かつて幾度も貧民区の火災や豪雨後の水害の支援活動に参加したが、アフリカ南部では旱魃以外、大きな自然災害はあまり起きたことがないと記憶している。

インターネットでベイラの被災状況を調べていると、私が住んでいたヨハネス

●ベイラ市西南方にあるプンウェ河が氾濫し、沿岸は大きな被害を受けた。ブジでは被災後3週間たっても依然交通が寸断されたままで、支援物資はなかなか到達できなかった。（撮影・楊俊亭）

ブルグから千三百キロほどしか離れておらず、車で行ける距離であり、飛行機でも僅か一時間半で到達できることが分かった。私は直ぐにモザンビークの蔡岱霖師姐（スージェ）に連絡を取ったところ、ベイラには慈済ボランティアがいないため、首都マプトの慈済ボランティアが幾つかのチームに分かれて遥か遠くのベイラに救援活動に向かっていることを知った。蔡岱霖師姐（スージェ）は、「被災後、現地の水源地が汚染され、何よりも必要としているのは浄水薬です」と強調した。

ヨハネスブルグのボランティアは一日で一万本の浄水薬を集めたが、ベイラへ輸送するのに少なくとも三日掛かる。私は浄水薬の一部を携えてベイラで慈済ボランティアと合流することにした。幸運にも翌日の始発便の航空券の最後の座席を手に入れることができた。そして急いで病院に行き、コレラ、マラリア、破傷風、インフルエンザ、B型肝炎など、七種のワクチンを接種したり服用した。

三月二十九日、ベイラ行きの始発便は乗客の半分が各国の救援人員で、それぞれ所属組織の制服を着ており、私も慈済の制服を身に着けていた。私のスーツケースの三分の二は浄水薬三百本に占領されていた。搭乗後、機内の座席が半分しか埋まっていないことに気付いた。実はその時期に被災地へ向かう飛行機は支援物資輸送の任務も兼ねていたため、座席数の半分しか販売していなかったのだ。

現地ボランティアは慈済災害支援の強み

私は今回初めてモザンビークを訪れた。飛行機が高度を下げると、窓外のベ

イラ市の様子が目に映った。プンウェ河両岸には洪水の痕跡が見て取れた。街の至るところが被害を被り、背の高い椰子の木も大きな木も、全て同じ方向に倒れており、「イダイ」が上陸した時の風力十六という風速の凄まじい威力を感じさせた。

三月の南半球は夏で、モザンビークの蒸し暑い天気は台湾の真夏のようだった。空港を出て、蔡岱霖師姐（スージェ）の車でこの港湾都市を走っていると、私が子どもの頃に見た後進国のアフリカの諸国そのものであった。

舗装されてない道路は凸凹で、汚い古い街道に人と車が入り乱れ、大部分の家屋の多くは屋根がなく、電信柱は倒れ、道路は砂で蔽われていた。水が引いた後、世紀の大災害に遭ったベイラ市には重い空気が漂っているに違いないと思っていたが、意外にも市街地は静かで、人々は楽天的に現実を受け入れ、復旧に力を入れていた。

毎朝九時、ベイラ空港の緊急援助指揮センターで、国連の職員による災害の近況報告と各ＮＧＯの報告が三十分間行わ

●ＮＧＯ組織がテントを被災者に提供。新たな生活を始めるため、わずかな財産とテントをまとめて女性は避難所を去って帰って行った。

●「イダイ」は上陸後、勢力が衰えたとはいえ、風速はなお風力16に達し、巨木をなぎ倒した。農村の粗末な家屋は倒壊を免れなかった。

●ティカ村の男性ドミゴは被災後、一時屋根のない教会に避難していたが、今は少なくとも雨風をしのげるテントがあることに感謝している。

れた。それによって世界各国の慈善支援団体が互いに配付や調査の時に会場と情報を共有し、物資を最も必要な場所へ届けられるよう討論することができた。

少なからぬ人が慈済の制服を見て、台湾の慈善団体だと知り、日々の会議に招いてくれた。会議を通して国際組織との協力の重要性を知ると共に、慈済がモザンビークに現地ボランティアを有していることは、他の団体よりも被災地に深く関わって支援を最も必要としている人々に直ちに食糧と生活物資を届けられるという強みであることも分かった。

三月下旬、慈済ボランティアのベイラでの第一段階の仕事は手分けして被害調査と配付物資の準備で、小規模の配付活動をすることだった。しかし、被災後、水や電気、通信設備が大きく損壊し、電話やインターネットがほとんど使えないなど、多くの困難にぶつかった。ベイラ市以西では多くの場所で水がまだ引いておらず、重被災地のブジ等では交通が中

断していた。

被災後、ベイラ市では物価が二倍以上に高騰したが、市街地の商店には商品がなく、お金があっても食糧を手に入れることができなかった。そこで慈済は必要な支援物資を千二百キロ離れた首都マプトで購入して袋詰めし、トラックで二十九時間かけてベイラへ運んだ。それでも物資の価格はベイラ現地で買うよりも安かった。

孤立した村に到達した最初の食糧

現地ボランティアは災害調査でマニカ州ドンベ区を訪れた。河畔の小集落であるムチャイ村は「イダイ」により河が氾濫し、全ての家屋が流されて百十九人が亡くなった。村は孤島のようになり、外部との交通は水路に頼るしかなかった。

三月三十日、村民が舟を漕いで慈済ボランティアが運んできた白米を受け取りにきた。それは被災後初めて受け取った物資だと酋長が感激した様子で話した。丸木舟に積んだ十五袋の白米は村の今後三週間分の食糧となるのだろう。

ベイラ地区での慈済最初の物資の配付活動は郊外のドンド難民キャンプで行われた。そこには百五十のテントがあり、四百世帯余り、二千九百人が避難しており、被災後二週間の間、一世帯当たり一日にすりつぶした豆二碗を支給されていただけだった。

モザンビークの現地ボランティアは前日に家庭訪問を終え、名簿も集めていた。物資配付当日、軍人が秩序維持に当たる中で、世帯の名前を読み上げて確認し、白米と青いバケツに詰めた塩、豆、油、清掃用具、浄水薬、蚊帳等を手渡した。生活物資パックは一家五人が一カ月使用できる量である。

物資の配付は午後二時過ぎに始まり、厳しい日差しの下に行われた。現地ボランティアは配付する前、バケツとコップを持って人々に水を提供した。被災地では清潔な水源が欠乏しており、ボランティアの提供する冷たい飲み水は人々をことのほか喜ばせた。我先にと水を飲む様子に人々の水への渇望が見て取れ、心が痛んだ。

本を乾かす子ども、「学校に行きたい」

配付活動を終えて帰り道、ボランティアは酷く損壊した小学校を見かけた。

ムジンガネにあるこのジュリアスニエレレ小学校は校舎がボロボロになり、机や椅子が木の上に引っかかっていた。大きな木が倒れ、あたり一面に屋根瓦や教科書、ノートが散らばっていた。

瓦礫の上に座っていたマリオは小学三年生で、不安な眼差しをしていた。二週間前のサイクロンで家が倒壊したので、現在は祖母と住んでおり、学校も倒壊し、机や椅子は水没したと話してくれた。

「算数が一番好き、将来は看護師になって人々を助けたい」。マリオは私たちを彼の教室へ案内し、何もない場所を指してここが自分の席だと言った。

ボランティアが学校に何をしに来たのか尋ねると、「学校に行きたいんだ。サ

●４月初旬、慈済が大規模な物資の配付を行い、ンハマタタンダのテント区に住む高齢者や子どものいる家庭に緊急生活物資を支給した。ラメゴ村の４００世帯が笑顔で物資配付地点に集まり、受取を待っていた。

イクロンの後は悲しいことばかり、学校が懐かしい…」と言った。

ディノフォイ師兄（スーシオン）はそれを聞いて心を痛めていた。モザンビーク辺境の漁港に生まれた彼は子どもの頃家が貧しく、故郷の友人の最大の望みはお金を貯めて自転車を買うことだった。彼は自分が教育を受け、人生を変えることができたことに感謝していたが、目の前のこの子はどうすればよいのか。

子どもたちは大切に教科書を拾い集め、太陽の下に乾していた。学校の壁には「O Seu Futuro Melhor Comeca Aqui！（輝かしい未来はここから始まる）」というポルトガル語の標語が書かれてあった。しかし、黒板が掛けられた壁しか残っていない教室もあった。

三月末、モザンビーク国家救援センターと国連の記録によると、三千以上の教室が被災し、五万棟近くの家屋が全壊したとあった。食糧や薬以外に、被災者と子どもたちの将来にも思いを馳せなければならない。

（慈済月刊六三〇期より）

●生活物資を持ち帰るンハマタタンダ村の村民を手伝う慈済ボランティア。慈済は4月末までに緊急災害支援として1万世帯に生活物資を届ける計画である。

ジンバブエ Zimbabwe

土石流後の帰宅

文・楊景卉（大愛TV記者）撮影・李文傑（マレーシアボランティア）訳・惟明

●チマニマニ郡にある数カ所の村は土石流に呑まれ、残骸だらけだった。ボランティアは住民の家まで付き添った。土石流に遭った自宅から辛うじて写真を見つけたが、もう家は無い。

サイクロン・イダイがジンバブエの東部を襲い、甚大な被害を被ったチマニマニ郡は村ごと押し流され、地形がすっかり変わってしまった。住む家を無くした村人は避難所に避難し、政府やNGOから生活物資を受け取って生活している。彼らが災害の後にできた川を渡り故郷に戻った時、帰る「家」はどこにあったのか、もはや跡形もなかった。

モザンビークと国土を隣接し、アフリカ内陸に位置しているジンバブエは三月十五日から十七日まで、サイクロン・イダイに襲われた。たった二十四時間の間に六百ミリの集中豪雨が降り、土石流を引き起こした。東部のマニカランドが最も甚大な被害を受けた。中でも国境に近いチマニマニ郡は全域の九割以上が壊滅した。

東部へ続く主要道路や橋は崩壊していたため、慈済ボランティアの朱金財と現地ボランティアは、災害の翌週に首都であるハラレから現地のガイドに案内され、凸凹のできた山道を大きく迂回してマニカランドの被災地を視察すると共にトラックに食パンと浄水剤を満載して向かった。チマニマニ郡までは以前なら五時間ほどの道のりだったが、被災後は十時間以上かかった。途中で何度も通行止めに遭遇したボランティア達は水・電気のない軍のキャンプのはずれに野宿し、翌日やっとチマニマニ郡にたどり着いた。

途中いくつもの部落を通り過ぎ、幸いにして生き延びた住民に話しを聞くと豪雨があった夜は洪水が四方八方か

ら押し寄せ、根こそぎ倒れた大木が流れきて、水が引いた後は一面、泥沼になっていたそうだ。被災後の一周間、現地ではヘリコプターによる限られた物資の供給しか行うことができなかった。山の中なので、日中の気温は摂氏二十度台だが、夜になると摂氏十度以下に下がる場所である。

被災地では断水と停電が続き、人々は道路脇の水溜りから水を汲んで使っていた。ボランティアはまず浄水剤を配った。平均して百五十ＣＣで一リットルの原水を浄化できる。最初の視察により避難所と災害の状況を把握し、住民が食糧、浄水剤、エコ毛布などの生活物資を必要としていることが分かったため、早速配付準備に取り掛かった。

ガソリンを急いで探す必要がある

ボランティアは支援物資を調達する為にハラレに戻ったが、同時に燃料不足の問題を克服する必要があった。外貨不足、経済不振など様々な理由から市街地域ではガソリンを入れるのに四時間も列に並ばなくてはならないからだ。これによってひどい渋滞も起きていた。

ジンバブエでガソリンを入手するのは簡単なことではない。しかし朱金財は長年に亘って貧困家庭の訪問を行っているので、それには慣れている。しかし、被災地に支援物資を輸送するトラックは三台もあるので、ボランティアは日々ガソリンが残っているスタンドを探し回り、前もって列に並んでガソリンを買わなければならなかった。「一番長い時で六、七時間待ちましたが、幸い買えました。数時間待ってもうすぐ自分の番なのにガソリンがなくなってしまい、被災地に行くことができなくなったこともありました」。支援のために奔走している朱金財は 嗚咽を禁じ得ず、「慈済人は現場まで行くと全く違う気持ちになります。被災地ではとても支援を必要としています」と言った。

慈済が長年寄り添ってきたコミュニティであるイースト・ビューの住民達も支援の呼びかけに応じた。ボランティアが集会所に到着する前から、多くの人影が見えた。その日は八百人あまりが集まり、人々はできる限り服や小遣いを寄付し、被災地に送る為に慈済に託した。

七十八才のアグネスさんは一人暮らしで仕事をしていないが、ジンバブエ・ドルで三十セント（日本円で十銭弱）を寄付した。これは彼女の蓄えのほとんど全部だった。「私はサイクロン・イダイによる死傷の状況をニュースで知り、悲しくて涙がとまりませんでした。彼らを祝福したいと思っていたのです」。

首都近郊のジャカエレア地区は多くの貧困家庭が地方から集まって住んでいる場所だったが、彼らは相次いで家から最も価値ある物資を寄付した。「服と靴は被災地の住民が今最も必要としていて、私たちにも寄付できるものです」。

傷付いた人達が互いに慰め合う

東部の山脈間の高地に位置するチマニマニには風災が過ぎた後も洪水によって流されてきた石と泥が一面に積もり、山肌には赤土が露出し、道路が寸断されていた。三週間経った今でも地方政府は依然としてインフラ関連の修復に力を注ぐだけで、生活関連の援助は殆ど行われていない。

国際救助隊と救助犬は遭難者の遺体を探し続けた。山の麓にあるコパ部落では行政センターと百棟以上の建物が土石流に流され、数百人が行方不明者になっていた。地形の変化によってできた小川の流れは激しく、住民達は政府が支給する生活物資を受け取る為に、注意しな

●チマニマニ郡全域がひどい被災を受けた。慈済ボランティアは浄水剤、主食となるコーンミール、おから、食用油などを7つの避難所に避難した住民に配布した。

がら橋を渡っていた。

ジンバブエの慈済ボランティアは四月五日と十三日の二回にわたって大規模な配布活動を行った。現地の人達に主食のおからを支給したり、七つの避難所で炊き出しをしたり、夜間の寒気を防止するためのエコ毛布を支給したりした。被災した四百世帯は食用油、塩、キビ砂糖、トウモロコシ粉、衣類を受け取り、住民達の喜びの拍手と歌い声は止まるところを知らなかった。

コンガ村では百世帯近くが土石流に流され、家屋が半壊した千名あまりの住民が四つの避難所に身を置いていた。「他の団体は物を置いていくだけで、直ぐこの場を去りました」「皆さんは物資を届けてくれただけではなく、我々のために祈ってくれました。皆さんの支援に感動し、初めて人情の温かさかさをしみじみと感じました」とマックンタ婦人が慈済ボランティアに話した。

感動があり信頼が生まれ、マックンタ婦人はボランティアを彼女の家があった場所に案内した。「我が家は三部屋あり、ここから先は庭で、鶏を飼っていました。向こうは私の厨房でした」と彼女は目の前の黄色い土砂の方を指しながら語った。

サイクロンの夜、土砂が家の中まで流れ込んだ。主人と二人の娘は怪我したが、一家は運良く逃げられた。今は教会に避

慈済の支援

●南アフリカの内陸に位置するジンバブエはハイパーインフレーションで知られ、経済、教育、公共衛生の事情は年々悪くなる一方で、失業率は9割を上回っている。

●慈済は２００７年に初めてジンバブエで配布活動を行い、台湾籍のビジネスマン朱金財はジンバブエの困難な政治と経済事情の中、慈善救済と児童教育に力を注いできた。２０１４年に初めて、現地の台湾人として慈済委員の認証を受けた。

●２０１９年のサイクロン・イダイは２７万人の被災者を出し、東部の被災地では９割以上の道路が破壊された。首都ハラレの慈済ボランティアはマレーシアからのボランティアの協力を得て、甚大な被害を受けたマニカランドを視察し、生活物資、エコ毛布、浄水剤をのべ３７２５世帯に配付した。

難している。サイクロンで全てを無くした彼女はあてもなく歩きまわり、遠い川に洗濯をしに行ったり、支援物資を受け取る為待合所に行ったりしているが、混み合う教会にはいたくないと言う。そういう状況は避難所でよく見られる。

支援がなかなか届かなかった一家だったが、慈済ボランティアが温かく接すると微笑を返してくれた。下の娘もボランティアの持って来た服を着て、将来に希望が持てるようになったと言った。

今回の救援チームの中には現地ボランティアであるジェーンがいた。彼女はチマニマニ郡の出身で、このサイクロンで家族四人を無くした。「家族は嵐が収まったと思っていました。しかし胸の高さまで水位が上がっていたことは予想外でした」。故郷に戻ってもジェーンは心の痛みを隠せない様子だった。両親と兄姉が依然として行方不明なのである。

石の前に一人の女性が立っているのを見かけたジェーンは近づき、「私の兄はピココ地区におり、洪水に流されました」「私達は悲しむことをやめ、全てを天に任せましょう！泣かないで、泣かないで、私達は神を信じましょう。全て良くなりますよ」と泣きながら言った。お互い悲しみのはけ口を見つけたように、家族六人を無くしたその女性はジェーンをきつく抱きしめた。ジェーンは小愛を大愛に変え、ボランティア達と一緒にもっと多くの人を助けることを約束した。

（慈済月刊六三〇期より）

●ジンバブエの人々は台風被害のひどさを知ると、首都ハラレ郊外に住む貧困窮被災地に送りたいとボランティアに託した。（撮影・楊景卉）

マラウイ Malawi

住民が協力して村の復興を成し遂げる

文・周憲斌、袁亞棋（南アフリカ慈済ボランティア）
撮影・周憲斌　訳・心愛

熱帯低気圧が通過した後に建てられたレンガ造りの家々が山間集落の村人達を庇護している。村の酋長は建材を提供し、集落の住民が全員参加して家を建てた。女性と子どもはレンガの搬送を手伝い、皆は慈済ボランティアと一緒に家の再建に力を合わせた。村人の一致団結により、時間が経つにつれてレンガの壁の高さは高くなっていった。

➡慈済は２０１８年にチンゴンベ集落でケアを始め、今年中に現地の住民と協力してレンガ造りの家を建設する。（撮影・楊景卉）

早朝三時に雨が激しく降ったので目が覚めてしまい、眠れなくなってしまった。南アフリカ慈済ボランティアの潘明水は、集落の住宅建設の進度に影響が出ることを心配していた。朝九時頃、ようやく雨が止み、ボランティアはまずセメントを買いに行った。トラクターの後部に詰め込まれたセメントの袋を大事に見守りながら、住宅建設のために山間にあるチンゴンベ集落に向かってぬかるんだ道を急いだ。

毎年十一月から翌年の五月までがマラウイの雨季である。今年三月の初め頃、熱帯低気圧の影響でマラウイ南部の何カ所かに洪水被害が起きた。その後、勢力が強まってサイクロンに変わり、隣国モザンビークにさらに大きな被害をもたらした。

マラウイ現地の慈済ボランティアはいち早く駆けつけて被災地を視察した。一方、南アフリカの多国籍支援チームは、もともとマラウイで「コミュニティのケアに着手する」という計画を立てていた

ので、手際よくトウモロコシ粉や古着、その他の物資を二千四百キロ離れたマラウイにバスで運び、被災地の支援を開始した。

マラウイ南部のブランティ市では、四万人以上が被災した。その近郊にあるチンゴンベ集落は、以前から慈済がケアをしていた地域である。調査したところ、村では百二十世帯の家屋が倒壊したことが判明した。貧しい村人の家は、レンガに泥を塗っただけの粗末な造りなので、大雨が降ると倒壊してしまう。慈済ボランティアは現地で調査し、より強固なセメントとレンガを建築材料とすることを決定した。三月十八日から集落で甚大な被害を被った七十世帯の貧困家庭を優先的に入居させることにし、レンガ造りの家の支援建設が始まった。

葦の茂る中、水を汲む人の長蛇の列

その日は建設開始してから二日目で、ボランティアはブランティのマーケットから山間に向かった。サイクロンに見舞われた路面には段差が三十センチのところもあり、普通の車では通れない状態だったが、十一時前にやっとチンゴンベ集落に辿り着いた。見ると昨日は人の膝の高さだった壁が一夜のうちに腰の高さにまで達していた。というのも、朝の八時から村人たちが早く工事を進めようと自発的に手伝ってくれたからだ。

「慈済が村のためにしてくださった全てのことに感謝します！」と村の酋長のゴッドフライマドカニが目に涙をうかべて言った。見も知らぬ慈済ボランティアが遥か遠くから支援に来てくれたことに、酋長は心を動かされ、態度を一変させた。そして、もっと大勢の村人に手伝っ

●暴風雨にさらされた粗末なレンガ造りの家が倒壊したが、住民はそこに身を寄せていた。

てくれるよう呼びかけ、自らも一緒にセメントを運ぶなどして手伝った。

豪雨のためデコボコになった道路を、早朝から村人が土を盛って舗装したので、建材を運ぶ車が安全に出入りできるようになった。建設に使うすべてのセメントとレンガは、ボランティアが町で買い求めた。セメントをかき混ぜる作業は、数人の建築経験を持つ作業員に任せ、村人たちが川辺からバケツで砂と水を運んだ。

この地方の習慣では、水を汲む仕事は女性の役割なので、村の女性が長い道のりをたどって水源から村まで水を運ぶのである。所によっては、水源地が村から二キロも離れた場所にある。女性たちは水を汲んだバケツを頭にのせて、葦の茂みの中を建築現場まで運んだ。南アフリ

●部落の女性と子どもは、レンガや砂や水を何度も行き来して運んでいた。レンガ造りの家を修繕するか再建するかは住民の意向を尊重し、4月中旬までに既に30世帯の家を建設した。

慈済の支援

●アフリカ東南部の内陸国マラウイは、頻繁に自然災害に見舞われ感染症が多発している。国民の教育普及率が低く経済も停滞しているため、国の人口の半分が貧困層以下の生活をしており、国連では低開発国の一員に数えられている。

●２０１８年、慈済南アフリカ支部のボランティアは、国境を越えてマラウイに来ると現地の住民に慈善の支援を行っていた。

●２０１９年、サイクロン・イダイの被害は８７万の住民に影響を及ぼし、８万人が家を失った。避難所には食糧や医療品が不足している。南アフリカのボランティアがマラウイのブランティ市近郊のチンゴンベ集落で支援を行った。３月中旬にトウモロコシ粉を配付し、住宅建設の支援した。４月には南部のエンサンジェ集落を見舞い、トウモロコシ粉を配付し、調査を行って援助を開始した。

カのボランティア周憲斌は水源地に同行した。「水を運ばずにただ歩いてついていっただけでしたが、それでも息苦しくなり、山道を登るとさらに息が切れました。しかし、彼女たちが頭に水を載せて平気で歩いているのには驚かされました。そして、戻ってきてからも楽しそうに他の作業を手伝っているのです。その姿はとても感動的です」。

皆が動くと効率が上がる

最初のレンガ造りの家から始まって、作業が日ごとに拡大し、様々な場所で建設が行われた。最も多い時は八棟の建設作業が一斉に行われていた。しかし、天気の変化がいつも工事の進行を遮った。雨上がりの地面がぬかるんだため、一時、作業が中断した。

「道路の情況がよくないため、セメントとレンガを集落へ搬送することを断る会社もあり、自力でやらなければならないことがたくさんあります」。シニアボランティアの潘明水と一緒に被害状況の視察や待機建材を調達する南アフリカのボランティア周憲斌が言った。「村人たちが自らボランティアになってくれたことに感謝しています」。誰もがボランティアとして参加した。幼い子を背中におんぶした女性もレンガを担ぐことができるし、四歳、五歳の子供も頭にレンガを一つ載せていた。年長の子どもになるとさらに逞しく、レンガの重さを平均して二・五キログラムと計算すれば、女子

児童は一回に二十キログラム相当のレンガを運んでいたことになる。

村の老若男女や慈済ボランティア合わせて百人以上が作業に参加したため、建設作業も同時進行が可能となり、作業ははかどった。問題は、地域が分散しているため、各拠点の進行状況をどのようにフォローアップするかということだった。そこで、工事総監督を務めるボランティア、ジョアナムダラが何人かの村人を連れて建設現場を巡回し、レンガ、砂や水が不足すると直ちに報告して保管場所より補給するという方法を考案した。

マラウイは、慈済がアフリカで支援する八番目の国である。二〇一八年八月、慈済南アフリカ多国籍支援チームが、初めてマラウイのマチンジリ村で支援を行ったが、その時に建てられた家屋がジョアナムダラの母親の家だった。彼女は、慈済ボランティアが遠方から自分の母親を支援してくれたことに感動し、慈済ボランティアに加わったのである。実はここ数日間熱を出している子供を母親に見てもらい、自分は建設現場で全力奉仕していたのだ。

マラウイ住民の殆どは貧しく、山岳地帯には生計の立てられない高齢者だけの世帯が多く残っている。「慈済が素早く家を建ててくださったので、もう雨に濡れる心配がなくなりました。有難いことです」と年配の村人が涙ぐんで感謝の言葉を述べた。

村には幾つもの家が土石流の被害に遭いやすい危険な場所にあるため、より高い所に移住して再建する必要がある。集落では村人の移住については、酋長の許可を得なくてはならない。酋長は地位が高いので工事の進行状況にも関心が高く、毎日のように建設現場に来た。そして慈済の支援が村にとって非常に大事であると認めたため、村人の移住問題は解決した。

酋長の自宅近くには建材用の木が植えられてある。「これらの木はもともとは販売するために植えたのですが、私も慈済人のように皆のために役に立ちたいので、無償で提供したいと思います」と言った。

セメント、レンガや建材、そして百人以上の村人とボランティアの食事に使うトウモロコシ粉や野菜などを購入するたびに、潘明水は必ず店の人と慈済の理念を分かち合うようにしていた。それは、

地元の人間にも自分たちの同胞に手を差しのべるチャンスを与えるためだった。

ボランティアがいつも市場で買い求めていたため、自ずと「慈済」が災害を支援していることは大小の商店や屋台の人々の知るところとなった。知らず知らずのうちに商売の枠を超えてボランティアと友好関係を築き、心を動かされた野菜売りの女性は、一握りの野菜を建設現場で作業する住民とボランティアのために寄付するといった。トウモロコシ粉を配付するビニール袋が不足すると、その店の店主が無償で提供し、復興のために協力してくれた。小さなレンガ造りの家が貧しい村人を庇護し、これからも更に多くの地元の人々の心に愛を芽生えさせてゆくに違いない。

日が暮れて、ボランティアと村人の仕事も一段落した。帰り道は依然として泥だらけで車は走りにくかったが、それでも潘明水は「あたりは暗くても、近いうちにここから菩薩が湧き出るようになるでしょう。そして皆が心を一つにして、美しい愛で満たされる社会になることでしょう」と期待を寄せた。

（慈済月刊六三〇期より）

□地球にやさしい思考

地球のあちこちで起きる天災や地変は、まさに経典に予告されている壊劫（仏語。四劫の第三。世界が破滅する時期）の証である。どんな所に起こった災害であっても、必ず全世界に影響を及ぼすことになる。

（『地球と共に生きていく』より）

撮影・蕭耀華　2014.01　フィリピン　台風30号

子供のような純粋な心を失わず

◎文・林香秀　訳・葉美娥

大学時代「慈済青年社」に入り、いつまでも初心を貫いていくと発願した。卒業後就職しても昔の誓いは依然として続いているだろうか？「子供のような純粋な心は変わるのでしょうか」と證厳法師はかつて憂慮したことがある。だが成功大学「慈済青年社」部長だった陳冠廷と林国祥は、この約束を忘れずに、慈誠（男性委員）の養成訓練に参加して認証を授かり、「あなたの子供が只今戻ってきました」と證厳法師に報告した。

「君が国祥君ですか」「いいえ、違います。彼が国祥で、私は冠廷です」このようなやりとりが国祥と冠廷の周りでよく起こる。二人とも若くやせてハンサムで背が高く、共に成功大学の「慈済青年社」の一員で、しかも部長経験者という共通点があるからだ。「栄民の家（身寄りのない国民党軍の退役軍人の住む所）」、「弱者家庭の学童保育」、「地域住民の親子勉強会」、「骨髄寄贈志願登録の宣伝」などのボランティア活動には必ずと言っていいほど彼らの姿があった。

（撮影・陳貞桃）

陳冠廷（右）

- 1990年生まれ、出身は高雄、現在は台湾の成功大学大学院で電子機械の博士課程を専攻している。
- 2019年慈誠の資格を取得し、法号は誠峰と言う。

林國祥

- 1992年生まれ、出身は台中、台南郵便局の窓口業務を務めている。
- 2019年慈誠の資格を取得し、法号は誠岳と言う。

●陳冠廷（右）２０１８年「世界慈済大学生の国際交流」でマレーシアグループに参加し、クアラルンプールの難民学校で子供たちに授業を行った。（撮影・張小娟）

冠廷はこう言った、「慈済青年社が私の人生を変えてくれました。大学一年生の時、単にこの部活はなんて温かく愛に満ちているグループなのだろうと思っていました。その時の私は、手のひらを下に向けようと言う意味が分からず、ボランティア活動にも参加せず、先輩やボランティアからの愛を受けるばかりでした。見知らぬ人に自分の愛を無条件で奉仕できるのはなぜなのか、なかなか納得がいきませんでした」。

「その後のある日、栄民の家に行き寄り添いケアをしたことがきっかけで、奉仕した後の喜びがやっと理解できました。痩せて弱弱しいお爺ちゃんに向かって、両手を握りしめ、目を合わせた途端に温もりが伝わり、二人とも思わず目に涙が滲んできました。このような解釈のできない感動こそが寄り添いの力ではないかと思いました」。

冠廷は控えめな性格の男性で、あまり感情を表さない性格柄だが、大学三年生の時に慈済青年社の部長を引き受け、そして「弱者家庭の学童保育」を立ち上げた。彼は慈済青年社の部員を集めて、自分たちの時間と知識を使って精神的にも物質的にも不足している弱者家庭の子供たちを支援した。初めは五人の子供を九人の大学生で見ていたが、六年目の現在は三十人の子供を四十五人の大学生がケアしている。

彼は次のように分かち合った、「ある日のことでした。指導が終わり、ある子供を家に送った時、その家族の人が体調を悪くしていることに気付き、早速ボランティアたちに知らせ、病院に連れて行くことにしました。二回目の脳卒中でしたが、幸いに命は取り留めました。その人は病気が回復し、今は慈済環境保全センターで回収分類の仕事に投入しています」。

冠廷は何回も台湾の慈済青年社と一緒にマレーシアに行って人文交流に参加し、地元の子供と触れ合う時間を持った。そして、自分は愛のある慈済に導かれたこと、同時にこの愛を広げて行かなければならないことを深く悟ったのだった。

無常は人を迅速に成長させる

慈済青年社（大学のサークル）に入ったことで冠廷は仏法に触れるようになった。「世の中で遮ることのできない二つのことは、時間と無常です」と證厳法師のお諭しに若い彼は深く感じ入った。二〇一三年、彼が花蓮に帰って慈済青年ボランティアに参加した時、無常の風が彼の身に吹き付けた。「それは取りたくない電話でした。何回もかかってきてやっと出た時、受話器の向こうから弱々しく悲しい声がしたのです。お父さんが突然家で亡くなったから早く帰ってきなさいと母が泣きながら言ったのです。その時私はすぐには信じられず、今にも天が崩れてきそうな恐怖を覚えました」。

冠廷は自分に言い聞かせた、「自分は長男なのだから、いつまでも悲しんでいるわけにはいかない。早く成長して父の代わりに家庭の責任を担い、しっかり母と妹を支えていかなければならない。博士課程の学位も予定通りに修得しよう。逃げずに前に向かって進まなくてはならない。前へ進むことが唯一の道だ」。

今まで、ボランティアをすることは既に彼の生活の中心になっていたが、突然父親が亡くなったことでより深く考えるようになった。自分の体には所有権はなく、使用権があるのみなのだ。この世を去る時は、何も持っていくことはできないのだから。それよりも限りのある人生を有効に使い、もっと社会に有益なことをすることだ。だから卒業後は優れた先生になり、慈誠になるための見習や養成講座に参加しようと決意した。

役割を担うのは学習の始まりだと冠廷はいつも思っていた。慈済青年社に入ってからも進んで引き受け、楽しんで周りの人と取り組み、特訓を受けて更に役割を担い、自分を変えようとした。役割を担うと自分の能力不足が見えてくる。前向きな考えでこの不足に対応し、この不足を成長のチャンスに変えられるのだと彼は信じている。

ある時、勉強会を担当していたボランティアが急用で出席できなくなり、冠廷に代理してもらえないかと聞かれたことがある。準備時間は二週間しかなく、彼は迷った。今までこのような役割を引き受けたことは一度もなかったので自分にできるだろうかと考えたが、それでも心

の中で挑戦してみようと思った。

冠廷は落ち着いて「自分を見くびってはいけない、人間には無限の潜在能力があるのだ」という静思語を思い出した。「何事も初めからできるわけではない。学んで、繰り返し練習し、実際にやってみて自分の経験となるのだ」。それは冠廷が選択を迫られる時、自分に自信を持つように言い聞かせるための励ましの言葉である。

その勉強会で、冠廷は「父母恩重難報経」という恩返しの文章を皆と分かち合った。親不孝者が地獄に落ちていくという内容である。地獄という場所は実際には目に見えないが、自分の父がこの世を去った時、遠いところにいた冠廷は、父の側にいてあげられなかったことからくる辛さ、苦しみを覚え、まるで地獄に落ちたような気がした。

證厳法師はいつもおっしゃっている。両親に恩返しするには、物を供養するほか、両親が授けてくれた体で善行するのも恩返しの一つの方法だと。彼は慈済青年社のボランティア活動に参加するという実際の行動の中で父への恩返しをしている。

父がこの世を去った後、冠廷は週末になると、はほとんど家に帰って母と過ごしている。急に頼りになる人を失った母は、情緒が不安定になってイライラしやすく、家の人に当り散らすようになっていたからだ。冠廷は母の悲しみをただ聞いて受け入れ、自分の悲しみに耐え、彼が頼れることを母に信じてもらおうとした。そのようにして彼が寄り添ったおかげで母はうつ病から立ち直った。

「心すれば上手になれる」彼は仏法解釈の専門家ではないが、今回の準備に少し時間をかけて、上手に説明し、参加者に分かりやすくなるよう工夫した。更に證厳法師からの「因縁観」という開示を「業識倉庫」に例え、パワーポイントを使って動画で表し、分かりやすく仏法を理解してもらえるようにした。

冠廷はこう言った。慈誠となったから

●2019年1月3日陳冠廷は台南支部で慈誠の徽章を授かる前に、静思精舎の出家尼僧から胸花を付けてもらった。（撮影・陳貞桃）

には證厳法師の一代目の弟子として常に仏法の中に身を置き、法で心を整えて、自分の悪習に気を付け、仏法を伝承していくつもりであると。

歩んできた道で差し伸べてくれた数え切れない手

ボランティアの道中で出会った国祥のことを、冠廷は良き友だと思っている。互いに證厳法師の開示を分かち合っているからだ。国祥も長男であり、高校を卒業後、台中の家族を離れ、台南の成功大学に進んだ。初めて故郷から離れた時、自分でいくつか目標を立てた。その中の一つが社会奉仕団体に入って社会のために少しでも力を尽くすことだった。自分の父がかつて「人の成功とは、どれほどの財産を持つことではなく、どれほど人の役に立つかだ」と教えてくれたからだ。

国祥は親族年長者の信仰に従い、あらゆる祭日に線香が欠かせないだけでなく、お正月や節句のたびにお供え物としての魚や肉などを用意するのを常にしてきた。慈済青年社に入ってからは一切の衆生は平等であり、因果応報などの道理があることを次第に理解するようになった。また菜食を始め、暮らしの中でも環境保全に注意すべきことに気が付くようになった。

国祥は冠廷から慈済青年社の部長の役割を引き継ぎ、全ての活動も続けて推進していった。彼は卒業後まもなく郵便局の試験をパスした。「筆記試験の点数は合格ぎりぎりでしたが、履歴書に慈済青年社で色々なボランティア活動に参加したことを書いていたので、口頭試験の試験官に何度も関連活動を尋ねられました」彼は口頭試験で意外にも高い点数を得て採用されたのである。彼は慈済青年社に感謝している。そこでは色々なことが学ぶことができ、そのお陰で希望した職業に就くことができたからだ。

国祥は兵役の義務を終えた後すぐ就職した。二年後のある日、花蓮に戻って先輩に会いに行った。先輩は彼にこう言った。「君は変わったね。慈済青年社の時の国祥ではない。君の情熱と温もりが見られなくなった」と言われて茫然としてしまった。

国祥自身はずっと心を込めて生きてきたつもりだった。兵役の日々も真面目に勤め、他人と争わないよう、人に好かれるようにしてきたが、いつの間にか世間の風潮に流されてしまったのだろうか、彼はそのことに全く気が付いていなかなった。慈済クリーム（慈済人は人と打ち解けやすい表情を心掛けることの喩え）も依然として付けているが、それは仮面の微笑みを装って自分を保護するた

めであり、自分の心と外の世界の間に見えない壁を作り上げてしまったかのようだった。

国祥はかつて慈済青年社の活動で聞いた證厳法師のお諭しを思い出した。「子供のような純粋な心は変わるのでしょうか」と。僅か一年半、慈済青年社または慈済と離れたことでこのように大きな変化があるとは思ってもいなかった。

台南に戻った国祥は、昔の自分を取り戻そうと決意した。仕事が終わってから、静思太鼓チームに参加し始め、再び以前よく知っていた慈済の環境に戻った。「歩んできた道では数え切れないほどの手に支えられ、前に進むめるよういつもそっと私の背中を押してくれたり、まるで灯りを点すように拍手や励ましをくれました。多くの善縁とボランティアたちの寄り添いに、私の心は柔軟に明るくなり優しく照らされてきました」。

一生後悔しないこと

就職して最初の年に、国祥は順調に慈済青年社参加当時の初心を取り戻したが、退勤後の生活は依然虚しかった。見習い訓練に参加したかったが、社会人一年生の若輩者では慈済の活動が担えないのではないかという心配があったので取りやめた。

二〇一八年の初めに、「若いうち、両親の体がまだ健康な時に、自分が本当にしたいことをしろ。人生で後悔しないように」というある親友からの言葉で彼は目が覚めた。

自分の一生は職業、家業、志業を拠り所としよう。前の二つはまだ模索しているが、「慈済は私の今生の志業であり、證厳法師は今生の慧命の導師である」と国祥は信じている。慈済で色々な人の心に響く生き方を聞いたが、まさか自分が

●２０１８年の地域年末祝福会で林国祥は司会を担当し、仏法を伝承できる人になろうと心に決めた。（写真提供・林香秀）

ある日、地域の勉強会で自分の話を語り、それを聞いてもらうとは思ってもいなかった。自分の人生には波濤のうねりや険しい道は少なかったが、真実の生命の証には違いないのだ。

「考えすぎると失敗しますが、やればやるほど成功します」慈済青年社の阿板先輩とフェイスブックでそのことを分かち合った。国祥はこの一年間の養成訓練を振りかえってみれば、確かにそうだったと思っている。

この一年間の養成訓練の中で特に感銘を受けたのは訪問ケアと医療ボランティアだった。「病院の入り口に立ってボランティアをしている時に多くの人の出入りを見ました。豪華な車でも、バスか徒歩で来ても、一旦病院に入れば皆、生老病死に直面します。病の痛みからの離脱と生命の延続を求めることは皆同じです」と彼は言った

慈済青年社にいた時もボランティアたちと訪問ケア先の清掃をしたことはあったが、実際にケアをしたことはなかった。今ケアを学び始め、彼らが何を必要としているか深く考えるようになった。最も大変なのは当事者との対話で、思いやりのある言い方と考え方をして證厳法師の法をもって相手を慰めるよう努めている。

国祥は地域の勉強会で「父母恩重難報経」の中に出てくる懐胎の部分を皆と分かち合って共鳴を得た。そして二〇一八年の地域歳末祝福会の司会も担当した。そこで更に悟ったのは、どこにいても本分をしっかり守って、仏法を心がけるだけでなく実践するということだった。また仏法の解釈にもっと力を入れ、伝承できる人になりたいと自分に言い聞かせた。

二〇一九年一月、国祥と冠廷は、慈誠の認証を受けて静思弟子となり、両親から授かった体を善用して人に役立つことを発願した。国祥の胸には「仏心師志」という徽章が付けられている。「證厳法師、あなたの子供が帰ってきました、大きくなりましたよ」と国祥は心の中で語りかけた。（慈済月刊六二八期より）

●林国祥は（右1）慈済青年社で聞いた證厳法師の「子供のような純粋な心は変わるのでしょうか」というお諭しを思い出し、再びボランティアに戻ることを決意し、今年の始めに慈誠の資格を取った。（撮影・蔡明典）

【證厳法師のお諭し】

この世を照らす仏法

◎訳・慈願　絵・蔡錦蓉

仏陀の御教えを拝受して、生命の価値を発揮し、
仏、両親、衆生の恩に心から感謝しましょう。
感謝の心があって初めて人生は美しく、社会は平和になるのです。

毎年五月の第二日曜日は、世界中の人が祝う母の日、仏教徒が慶祝する仏誕節、そして世界中の慈済人が祝う慈済創設記念日が重なり、三節一体の喜びが満ちると共に善が循環する日でもあります。

人生を正しい方向に導く仏法は生命の価値を高めてくれます。五月に入ると各地の慈済人は次々と潅仏会を催し、尊重と感謝の心で以って仏陀に敬意を表します。台北市の中心街にある中正記念堂での潅仏会式典には、二万人余りが参加し、厳かな雰囲気の中で整然と行われます。この数年来、仏教界諸寺院の長老たちが式典に参加し、大衆の先頭に立って潅仏を行なっています。また、式典の前には心を一つにしてリハーサルを行うため、一瞬一瞬同じ動

作になり、人々に敬服と感謝の気持ちを起こさせると共に、仏教の偉大な荘厳さを表わすことができるのです。

彰化の慈済人は彰化八卦山の大仏広場で潅仏会の式典を催し、その様子を空中撮影しました。人が並んで作り出した「平安吉祥」の絵模様は皆が正しい位置に立ち、字がはっきり見えていました。人々の暮らしが平穏無事で、互いに和気藹々と尊敬し合い、争わないことを願っています。人と是々非々を争えば、争いの火はますます燃え盛ってしまいます。

世界四十か国以上で慈済人は潅仏会を行いましたが、中には素食で生命を護り、環境保全を呼びかけたり、異なる宗教の人たちが参加して和やかな雰囲気を醸し出していました。ある所は目出度い雰囲気の中、参加者が自在な気持でいましたが、別の会場では風雨で冷たくなって震える手で仏陀に甘茶をかけていました。しかし、仏法に対する心は揺らぐことなく、法悦に満ちていました。

二千五百年余り前、仏陀はこの世に生まれ、宇宙の真理に目覚め、この世で説法しました。この世の萬物には成、住、壊、空、そして人には生、老、病、死があり、人生をぼんやりと過ごし、迷いから覚めず、煩悩無明をいっぱい抱えたままでは、人生の最後に至った時、自分の思い通りにはならないことを種々の譬えをもって教えてくれました。ですから時を有効に使って生命の価値を発揮し、善を蓄積してどんな人生でも精進し、自覚を高めて智慧となるよう努力すべきです。

仏陀の教えを拝受した人々は、毎年のこの時期に敬虔な心を態度で表します。慧命を成長させてくれた仏に恩を感じ、その恩に報いるには身体で以って教えを実践するのです。また、両親が授けてくれた命に感謝しなければなりません。そして、多くの人がいる故に道が切り開かれたことを衆生に感謝すべきです。感謝の気持ちがある人生は美しく、社会は平和になるのです。常に法輪が回り、仏法が永遠にこの世に輝き続けることを願っています。

●

今年、慈済は五十三周年を祝い、五十四年目に入りました。四月から精舎では毎日のように朝山（仏号を唱えながら三歩一礼して前進する儀式）の

厳かな念仏の声と共に長い隊列が見られました。参加者は歳に関係なく皆、念仏しながら一歩ずつ整然と精進していました。精舎には毎日何千もの人がいましたが、常に静かで、人が多く集まっていても雑音がなく、それは皆がよく規律を守っている現れです。

国内外の他の慈済道場でも記念日に朝山が行われています。去年、フィリピン、オーモック市大愛村の村民ウェシは大きなバナナの房を担いで朝山に参加し、それを法師に差し上げるのだと言いました。フィリピンの慈済委員李偉嵩はそれをドライバナナにして精舎に持ってきました。

ウェシは今年も朝山に参加し、一頭の牛を連れてました。その牛は李偉嵩が放生（捕らえられた生きものを解き放す）用に買った牛で、屠殺の運命を逃れてウェシの土地で過ごしています。朝山の時、牛は背中にバナナ二房を載せて皆が跪いて拝んでいた時、前足を曲げて拝んでいました。生きとし生ける衆生には仏性が具わっていることを目の当りにして、皆さんの励みになったと思います。「生命を尊重する愛に感謝し、和して争わず共に福縁を結ぶ」スローガンのように、生命は全て平等であり、誰もが生命を重視し、尊重し、いとおしむように願っています。

数多くの朝山参加者は東アフリカ三カ国を襲ったサイクロン・イダイ被害のために貯金を寄付しました。皆さんの細やかな心遣いで愛の河の流れを途切れさせないようにと願っています。日々が平穏で健康なのは最高に幸せなことです。世の中に目を向けると言いつくせない苦難に遭っている国々があります。最近はいつも「目を開ければこの世、目を閉じれば地獄」なのです。極端な気候変動の下、大自然の威力は計りしないほど大きく、人が天に勝ることはあり得ません。慎んで自分を戒めてこそ、真の愛が現れるのです。

仏陀は慈、悲、喜、捨を私たちに教えましたが、それは菩薩道を歩む上でも最も重要な方法なのです。苦難に喘ぐ人には、福のある人の助けが必要ですが、それも互いの縁がなくてはなりません。誰もが苦難の人の人生における恩人になり、代々に渡る彼らの貧苦の人生から逃れる助けになることを願っています。力が強くても弱くても縁を逃さず、無私な人助けする愛を奉仕しなければいけません！

（慈済月刊六三一期より）

高齢者は問題ない

喜んで奉仕し、年を忘れ、社会の役に立ち、敬愛される年配者になる

ハンググライダーのように晩年を優雅に飛ぶ（下）

文・葉文鶯　訳・惟明
撮影・顔霖沼

兄弟と日夜交代で介護してきた父親の最期を見送った。彼はその時、自分は「最後の枕元の孝行息子」だったことに安堵して肩の荷を下ろした。自身は「老後のために子を育てる」と言う古い考えは持っていない。一人で老後を迎えることについて、体は若い頃のように戦闘力が高くなくても、設定された航路に沿って、エンジンがないハンググライダーのように、のんびりと飛行し、ソフトランディングできることを望んでいる。

●毎日朝晩、陳漢鈞はプールでラップを重ねながら泳ぐ。体を鍛え、これから先はハンググライダーが風に乗り優雅にソフトランディングするが如く、自立した生活を続け晩年を迎えたいと考えている。

同じく病気の家族を持つ経験者として、重病者が外出するのはどれだけ大変なことか、どのように在宅介護するかを、彼はよく知っていた。当時、その父親の散髪をするようになったのも一種の縁だと感じていた。

父親が床屋にいく時、陳漢鈞はタクシーを呼ぶ。床屋までは車で十数分で着く。当時の車イスは大きく、後ろのトランクに積み込む時、注意しないとすぐに車体に傷を付けてしまう。「百元も儲かっていないのに、車まで傷つけられたらたまらないよ」と運転手に嫌味を言われたこともあり、どうしようもなかった。何度かそうしたことがあってから陳漢鈞は散髪セットを買うことにした。誰かに教わったわけではなく、自習してマスターした。出来るだけ、綺麗に揃えればいいと思った。それから自然と二人の息子の散髪も彼が担当するようになった。

「理髪免許を取ったことは運転免許を取ったのと同じです。路上運転はやはり怖いです！かなりの実務経験を積まないといけません」陳漢鈞は仕事でも計画的に順序よくすることで知られている。彼は慈済大学（以下「慈大」と略す）の近くに中規模の床屋を見付けて、そこで見習いをしようと思った。

いきなり店に入っていくのは気が引けたので、彼は店先で中の様子を伺いながら、何度も行き来した末、勇気を出して自己紹介をした。オーナーの奥さんに来意を説明しようとしたところ、丁度毎朝の水泳仲間が通りかかり、「この人は真自面な人ですよ」と保証してくれたので、とりあえず彼に順番待ちのふりをして散髪の実技を見学することを許してくれた。彼はお客さんが帰ってから色々と質問をした。とても真面目な態度だった。

理髪を勉強した同期のクラスメートは相次いで自分の店を持つようになったが陳漢鈞だけは持っていない。「実は店を三軒を持っているようなものなのです。自宅のリビング兼床屋、慈大、そして慈大の社会人文学部にも散髪セットを置いています。何時でも切ってあげられます」。

彼は「熟年転職」で得た技能を無駄にしたくなかった。予約者は友人、同僚、彼らの病気になった家族、親戚など様々である。慈大のプールでライフガードをしている彼は学生の間で「陳爺」と呼ばれ、口込みで男、女学生達に広まっている。花蓮に就職した卒業生はいまでも彼と「髪」の縁は続いている。

リビングの壁のカレンダーには予約者

の名前と時間がしっかりと書かれている。常連は百人を超える。散髪の渋滞がないように時には一日二、三人の無料散髪を入れたり、時には病人や身体障害者の散髪の出前にも出かける。そのついでにそこで彼らの子供や孫の髪まで切ってしまう。その他、老人ホームから依頼があれば無料の散髪に出かけるのだった。

一度、外に出られない九十四歳の人の髪を切ったことがある。「このような長寿の人の髪を切れるのはとても幸せなことです」と彼が言った。

広く良縁を結んだため、彼は慈大で定年になっても古い仲間との付き合いが続いているだけでなく、新しく出会った人ともすぐ友達になれるので、家の中はいつも友人で賑わっている。散髪をしに来た人もいれば、彼の手作り餃子やターピン（中華風おやき）を食べに来た人もいる。

「外のバスケットに入っているのは、全部お裾分けです」陳漢鈞は日頃から色々な人のお返しがあるので、独居しているが孤独を感じない。

己で老後の道を敷く

中年で奥さんを亡くし、独居して五十歳になった頃の陳漢鈞は、自分の人生が

父親と同じようになるのではないかと嘆いていた。

五十三歳で慈大に就職し、プールのライフガードを六十五歳の定年まで勤めあげた。その後、近所の中学校でライフガードとして再就職し、今日に至っている。いつも赤いユニフォームに身を包む陳漢鈞は、常に笑顔でいるので親しみを感じさせ、見るからに元気そうだ。

十七年前、慈大に就職したばかりの時、奥さんの五十歳の誕生日をかつて勤めて

●お裾分けで食材をもらい、陳漢鈞は三食自炊している。質素な食事は油と塩分を減らし、健康食に徹している。

いたホテルでお祝いをした。その二日後、彼女が交通事故で亡くなるなどとは思いもしなかった。

告別式を終え、息子が台北に戻る前に陳漢鈞は息子を写真館に連れて行った。「生前、お母さんに家族写真を撮ろうと言ったのだが、何を撮るのと言われるだけだった。今となっては彼女は永遠の欠員だよ」。

奥さんに先立たれ、息子達がそれぞれの職場に戻った後、家には両親と奥さんの遺影しかなかったので、親子の写真を自分の生活空間であるリビングルームに飾った。いつ見ても心の底から喜びが湧いてくる。父親と同様、自分は今、男やもめになって独居生活をしているが、父親の介護を通して陳漢鈞が決心したのは父とは全く違う老後生活を送ることだった。

作家の張曼娟は高齢になって両親を介護することは自分の老後の「予習」であると語っていたが、しかし、如何なる状況に遭遇するかは予測し難い。陳漢鈞は作家のような感性と想像力は持っていないが、彼の生活は現実的だ。

父親の病因を検証し、病気になった原因は肉食で野菜が少く味の濃いことと、ナトリウムの摂取量が高すぎたことにあると考えた。「以前は料理に沢山塩を使っていましたが、今はその習慣を変えました」。また父親は若い頃毎日タバコを二、三箱吸っていたが、脳卒中の後、タバコが吸えなくなり、息子の体に染み付いたタバコの匂いを嗅ぐと堪らなくなるほど吸いたくなると言っていたので、「お父さんが吸えないから私もすぐにタバコを辞めました」。そのほか長年プールの仕事で毎日朝晩数百メートルを泳ぎ、常に運動していることも、風邪一つひかずに健康を維持できている原因だと思っている。

六年前のこと、慈大から家に帰る途中、自転車に乗っていたところをオートバイにぶつけられた。翌朝起きたら、両足に痺れを感じ、平泳ぎをする時に両足に力が入らなかったので整形外科の先生に診てもらうと脊椎が脱臼していた。手術を受けて八本の釘で固定する羽目になった。

その年の三月に手術を受け、息子は四月の清明の連休まで付き添ってくれた。兄弟力を合わせて、ベッドを一階のリビングに運び、トイレにも手すりを付けてくれた。彼はまた妹に薬の取り換えなどで暫くの間家にいてくれるよう頼んだ。医者が水泳はリハビリに良いと勧めてくれたので、まもなくプールサイドでライフガードとして復帰した。

「息子はみな都市で働いています。少なくとも落としものを自分で拾えるように、自分の面倒は自分で見たいのです。人に頼らなくてよい生活はいいものですよ」と陳漢鈞は朗らかに笑った。

安全で穏やかな着地

毎朝水泳の古い仲間が集まり健康維持のために体力を鍛えている。よくない生活習慣を止め、自立こそが最高の養生の道だと励まし合っている。

陳漢鈞は自宅近くにある中学校にできたコミュニティ・カレッジのマジック講座に申し込んだ。簡単な道具で友達に手品を見せ、喜んでもらっている。彼は時々孫の顔を見るために台北に行く。六歳になる孫の前では「凄いお爺ちゃん」である。

開業するつもりはないが、彼は散髪の腕も上げようと続けている。町に百元床屋や小さな店ができているので、彼が通る度に外から見ていると「おじさん、散髪をしますか」と店のスタッフが顔を出して声をかけた。すると彼はにこやかに親指を立てて「いいね」のサインを出した。コミュニティ・カレッジでは電動シェーバーを使う散髪の進級クラスに申し込んだ。

年をとっても学び続け、新しいことに好奇心を持てば、一つのことに執着したり自己満足したりしなくなるから、自ずと若い心が保てるのだそうだ。「年をとって動けなくなったら、誰か面倒を見てくれますか」このような問いに対して、陳漢鈞は考えることもなく、すかさず「老人らしく老人ホームに行きます」と答えた。

「樹静かならんと欲すれども風止まず、子養わんと欲すれども親待たず。豊かなお供えよりも、質素な養いの方がいいのです」と陳漢鈞は簡単に自分の持つ価値感を述べた。「最後の枕元の孝行息子」と自称するように、彼は社会の変化を素直に受け入れ、古くから「子供を育てるのは老後のため」という概念を棄てたのである。

彼は息子達が仕事と家庭のことに専念することを望んでいる。一人の老後について、彼の態度は積極的で楽天的だ。老いると若い頃のような闘志はないが、エンジンのないハンググライダーのように風に乗ってのんびり飛びたいものだと思っているそうだ。

「人によっては、定年になると体が一気に弱ってしまったり、重い病いで寝たきりになったり、ひどい場合は二、三カ月で亡くなったりします」。彼は右の掌

●慈大から定年しても、熱い情熱と爽やかな性格を持つ陳漢鈞は今でも赤いユニフォームに身を包み、自宅の近所にある学校のプールで大好きなライフガードの仕事を続けている。

を頭よりも高くあげて、右から左、上から下へと綺麗な放物線を描きながら老後の状態についての期待を語った。

「私はゆっくり滑降し、できれば息子の羽が生え揃うまで、少しでも長く飛び続けたいのです」。陳漢鈞は健康的な信念と行動に支えられているので、晩年はハンググライダーのように、きっと既定の航路に乗って安全で穏やか且つ安らかに最期を迎えられることだろう。

「人は誰でも年をとり、いつかは倒れる日がやって来ます」。老、病、死に関する煩悩は既に始まっているが、これから先はもう一つの悟りの道が待っている。（慈済月刊六二七期より）

人の世の苦しみを理解する

人々に交じってはじめてどうやって貧困を支え、苦しんでいる人を助けることができるかが分かります。心して苦しみの原因を理解すれば、自ら警戒心を持つことができるのです。

◎文・釋德侃／訳・済運

因縁果報に警戒心を持つ

三月二十五日、志業体の管理者たちは事務報告の時に「長期ケア」の話に及びました。上人は、「時代と社会の変化に伴ってこの世には違った種類の苦しみが生まれています。実際に群衆に交じり、観察して初めて貧困を支え、苦を助ける方法を理解することができ、それと共に理に適った行動が取れ、そこから欲念を打ち破って心を開き、社会で無私の奉仕ができるようになるのです」と言いました。

幸運と良縁に恵まれて生まれた人は平和な環境で成長しますが、それを当たり前のように思い、この世の苦しみを理解していません。機会があれば、慈済人たちと一緒に家庭訪問したり、独居老人の世話をすれば、この世にはまだ、こんな苦しい人生があることを知り、自然と慈悲心が起きて苦難に喘ぐ人に手を差し伸べると共に、彼らの苦しみの原因を理解し、自分にも警戒心を持つようになるのです。

また、上人は慈済創設時のことに言及しました。当時、台湾民衆の生活は全般的に裕福でなくても心は非常に単純で、社会には数多くの人が支援を必要としていることを知っており、一日に五十銭貯金すれば人助けができることを聞くと、皆、喜んで呼応しました。今は数十年前に比べて生活は格段に良くなりましたが、心の持ちようは変わってしまいました。大衆に善行することを呼びかけても、

今の世の中には既に貧困者は存在しないから奉仕したくないと思う人が数多くいます。しかし、実はそういう人に出会っていないだけで、存在しないのではありません。

一昨日、静思生活キャンプの修了式で各国の実業家たちがアフリカのサイクロン・イダイによる大災害を目にしました。アフリカ慈済人が視察時に撮影した苦難の様子の映像が流れ、「貧困者が貧困者を支援する」感動的な事実を知ったことで慈悲心を啓発され、自発的に慈済人と共に支援に行きたいと申し出ていました。上人は因縁果報の仏教道理で以て、福は自分で作るもの、業は付いて回ることを教え、福のある人はその福を享受するだけではなく、絶えず奉仕することで福を作らなければいけないと開示しました。そして、一歩踏み込んで、福を作って享受する考えを飛び越え、見返りを求めない奉仕をするこの世の菩薩になれば、心は軽やかで自在になり、慧命は成長するのです。

衆生の仏性が現れる

アフリカの慈済人は少人数で広大なサイクロン被災地を支援していますが、被災者数が多く、様々な困難に直面しています。二十六日、花蓮本部はアメリカの黄思賢師兄（スーシオン）、アフリカ・モザンビーク、ジンバブエの慈済人とネット会議を行いました。その時、上人は慈済人に視察と支援の苦労を感謝すると共に健康に気を付けるよう念を押しました。

昨年、南アフリカのボランティアが初めてマラウイを訪れた時、チンゴンベ部落の酋長は初め、側から冷たい目で見ていましたが、やがてボランティアたちが誠意で以て村民の世話をしているのを見て徐々に態度を軟化させ、遂にはボランティアとして一緒に貧しい村民を支援するようになりました。

今回の災害発生後、以前に結ばれた縁が大きな効果をもたらした

のです。南アフリカの潘明水師兄（スーシオン）が多国籍支援チームを引き連れて災害の視察と配付を行った時、酋長は村民を動員して酷く損壊した村民の家の再建を手伝いました。上人は報告動画を見て、「村民たちは自分も被災しているのに、喜んでもっと大変な人の手伝いをしています。その村には衆生の仏性が現れており、誰でも菩薩道を歩むことができることを示しています。とても感動しました。このマラウイの人たちは世話するに値し、彼らともっと深く良縁を結ばなければいけません」と大いに称賛しました。

南アフリカの慈済人はマラウイに災害支援に行くだけでなく、毛布と蚊帳などの物資をモザンビークとジンバブエまで運んで支援しました。異なった宗教の団体とも協力し合い、アフリカ各国の慈済ボランティアは「合和互協」という慈済の精神でこの三カ国の災害支援に臨んで欲しいと上人は言いました。中でも南アフリカのボランティアは一番多いので、経験が豊富であっても更に励み、機会を逃さず若い世代は出来るだけ参加し、それだけでなく責任を担って若者が若者に悟りを開かせるようにすることが大切です。

ジンバブエもモザンビークも被災地は慈済人の住んでいる地域からは遠く、交通も不便で、道路はぬかるんでおり、移動は困難を極めました。モザンビークのディノ師兄（スーシオン）たちは北に千キロ余りのところを訪れました。また、ジンバブエの朱金財師兄（スーシオン）とボランティアたちは車にパンと浄水剤などの物資をいっぱい積んで、十数時間掛けて被災地にたどり着きました。

「視察と緊急支援の後は後続の支援活動を行わなければなりません。その道のりは長く、やらなければならないことはたくさんあるのです。この世の菩薩道はとても長く、皆が大きな願力を持つと共に堅い意志と健康な体で広く人間（じんかん）菩薩を募り、より大きな力を結集して広く遠く歩むことで、苦難に喘ぐ衆生に最も必要としている支援を与えなければなりません」と上人が言いました。

（慈済月刊六三〇期より）

慈済大記事六月……

訳・済運

06・01	慈済基金会は79床のジンスー多機能折畳式ベッド（福慧ベッド）と235枚のエコ毛布を海洋委員会海巡署中部分署に寄贈した。これは苗栗から嘉義一帯の海巡署駐在所において防災や救済に使用されるものである。寄贈式典は本日、分署が催した「手と心を繋ぎ、海を守る」と題した浜辺清掃活動の中で行われ、慈済基金会の熊士民副執行長が代表で出席して寄贈した。
06・05	慈済基金会2019全世界四合一幹部精進研修会が5日から9日まで花蓮静思堂、13日から17日まで板橋と三重志業パーク、26日から30日まで台中静思堂で行われ、1500人余りが参加した。今年の各チームリーダーは海外ボランティアが務め、台湾ボランティアは別に行政チームリーダーとして側面をサポートしながら経験を授けた。
06・07	慈済シンガポール支部は初めて「2019年慧眼中国グローバル論壇」に招聘された。ボランティアは小論壇の「青年論壇」で慈済の国際災害支援と環境保全活動を報告し、若者が社会や人類に貢献するよう奨励した。
06・15	◎第11回海峡論壇が「民間交流を広め、融合発展を深める」と題して15日から21日まで中国福建省アモイ市で開かれた。慈済基金会は林碧玉副総執行長と執行長室の王運敬主任ら19人の職員とボランティアが代表で参加し、両岸公益、次世代成長へのサポート、博愛、両岸青年志願奉仕公益など4つの論壇で慈済慈善活動の経験及び双方

	の交流について報告した。 ◎慈済科技大学は15日と16日、「2019韓国WiC世界イノベーションコンクール」に参加し、2つの金賞と2つの特別賞を獲得した。そのうちの1つは人工肛門を使用する患者に対して特別に設計された「マジック装具」で、同時に金賞と特別賞、そして10万ウォンの賞金を獲得した。
06・18	◎インドロヨラ商業行政研究院国際協力室のラマサミー博士は4月から6月まで慈済大学で学術交流を展開した。期間中に花蓮と台北の多数のリサイクルセンターを訪れてプラスチック製品の回収問題を研究し、本日、慈済大学で研究成果を報告した。 ◎17日午後22時55分、中国四川省宜賓市長寧県雙河鎮でマグニ

	チュード6・0の地震が発生した。余震が続いているため、住民は屋外で夜を明かした。慈済基金会は緊急支援活動を展開し、18日から20日まで被災地で住民を慰問すると共に毛布とジンスー多機能折畳式ベッド（福慧ベッド）を配付した。 ◎慈済基金会は18日から21日まで桃園静思堂で「2019年世界人文真善美研修会」を催した。
06・22	花蓮慈済病院と慈済大学は中国南京中医薬大学と合同で、22日と23日、慈済蘇州志業パークにて2019年海峡両岸漢方西洋医学融合神経医学論壇を催し、約400人が交流した。
06・28	慈済基金会が制作した台東の慈善記録映画《如常》が本日、台湾全土の秀泰、威秀等27の映画館で上映された。

各国の連絡所

本部
971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL:886-3-8266779/886-3-8059966
志業中心（静思堂）
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL:886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

花蓮慈済医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL:886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL:886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山鎮和平路 125-5 号
TEL:886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL:886-5-2648000
台北慈済病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL:886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL:886-4-36060666
大林慈済病院
640 雲林県斗六市雲林路2段２４８号
TEL:886-5-5372000

慈済大学
970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL:886-3-8565301

台北支部（新店静思堂）
231 新北市新店區建國路 279 号
TEL:886-2-22187770
慈済人文志業センター
112 台北市立徳路 2 号
大愛テレビ局
TEL:886-2-28989999
静思人文
TEL:886-2-28989888

アメリカ
総支部（San Dimas）
TEL:1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL:1-408-4576969
ハワイ支部（Honolulu）
TEL:1-808-7378885

カナダ
TEL:1-604-2667699

メキシコ Mexicali
TEL:1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo
TEL:1-809-5300972

ブラジル　Sao Paulo
TEL:55-11-55394091

イギリス London
TEL:44-20-88699864

フランス Paris
TEL:33-1-45860312

ドイツ　Hamburg
TEL:49(40)388439

オランダ　Amsterdam
TEL:31-629-577511

スウェーデン　Goteborg
TEL:46-31-227883

オーストリア　Vienna
TEL:43-1-7346988

南アフリカ　Gauteng
TEL:27-11-4503365

中国蘇州
TEL:86-512-80990980

香港
TEL:852-28937166

フィリピン Manila
TEL:63-2-7320001

タイ　Bangkok
TEL:66-2-3281161-3

ベトナム　Hochiminh
TEL:84-8-38535001

ミャンマー Yangon
TEL:95-1-541494

マレーシア
Penang
TEL:604-2281013
Malaka
TEL:606-2810818

シンガポール
TEL:65-65829958

インドネシア　Jakarta
TEL:62-21-5055999
大愛テレビ局
TEL:62-21-50558889

スリランカ　Hambantota
TEL:94(0)472256422

ヨルダン　Amman
TEL:962-6-5817305

トルコ　Istanbul
TEL:90-212-4225802

オーストラリア Sydney
TEL:61-2-98747666

ニュージーランド
Auckland
TEL:64-9-2716976

慈済

２０１９年７月１７日発行・２７１号
中華郵政台北誌字第９０９號執照登記為雑誌交寄
Printed In Taiwan

発行人　釋證厳
発行所　慈済基金会
〒 112 台湾台北市北投区立徳路 2 号
編　集　慈済日本語翻訳チーム
杜張瑤珍・陳植英・王麗雪
校　閲　黒川章子
電　話　(886)02-2898-9000
FAX　(886)02-2898-9994
E-mail: 021620@tzuchi.org.tw

■

慈済基金会日本支部
〒 169-0072　東京都新宿区大久保 1-2-16
電　話　(03)3203-5651 ～ 5653
FAX　(03)3203-5674
E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw
tzuchi@tzuchi.jp

證厳法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本文への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただければ幸いに存じます。（日文組編集同人）

積み重ねてくる愛で　アフリカへの支援

台湾、アメリカ、オーストラリア、マレーシア及び南アフリカの慈済人医会メンバーは５月１９日から２１日まで、モザンビークのサイクロン・イダイ被災地で大規模な施療活動を行い、３日間で延べ３０００人を診察した。高雄の整形外科医、葉添浩医師は現地の通訳ボランティアの協力の下に子供の病状を診察した。

（撮影・蕭耀華　モザンビーク・ソファラ省ヤマ郡ラメゴ村 2019.05.20）

慈済ものがたり